

顔真卿撰『李梗墓誌』の字体について

宮崎 洋一

はじめに

二〇二四年五月、『顔真卿書李梗墓誌』^①が出版され、『李梗墓誌』がはじめて影印によって明らかにされた。これは、天寶八載（七四九年）八月に六十七歳で卒し、翌年十一月に長安城南の鳳栖原に葬られた李梗の墓誌で、題のあとに「殿中侍御史顔真卿撰」とあり、文の撰者は顔真卿とされる。これまでほとんど知られていなかった墓誌で、影印の冒頭に付された李旭文氏の「概述」でも、「この墓誌は出土時間がやや早く、人々に注目されることは無かった」と書かれている。

『李梗墓誌』には、書者の名前は無い。しかし、「概述」では、『李梗墓誌』の三年前の七四七年に埋葬された『羅婉順墓誌』と比較し、『李梗墓誌』と『羅婉順墓誌』が書いた年代が近く、用筆習慣が完全に同じで、結体が「寛博厚重」である特徴が繋がっているとして、顔真卿の書と推断し、『李梗墓誌』の方がやや行書の筆意があるが、より「軽松自然」で、唐代の「崇王」に雰囲気に合っているとした。

しかし、七五〇年十一月に埋葬された『李梗墓誌』と比

較するなら、なぜ三年前の『羅婉順墓誌』と比較して、同年五月に埋葬された『郭虚己墓誌銘』と比較しないのだろうか。『郭虚己墓誌銘』では、「朝議郎行殿中侍御史顔真卿撰并書」として『李梗墓誌』と同じ「殿中侍御史」である上に、「撰并書」と記している。

顔真卿の楷書には、主に顔元孫『干祿字書』の正字・通字・俗字の規範に基づき、ほとんど場合、その正字を用いる厳格な規則性がある。^②本稿では、『李梗墓誌』全六二二字の字体について、『羅婉順墓誌』七二八字と『郭虚己墓誌銘』一一三八字（細字を含む）に、『王琳墓誌』（七四一年）九一三字をあわせ、さらに『干祿字書』とともにこれまでの顔真卿の楷書を最も良く収集した『顔真卿大字典』^③を用いて検討したものである。

第一節 これまでの顔真卿の用例とは全く異なる文字

『李梗墓誌』の中で、顔真卿がこれまでの作品で用いたこ

とが無い字体で、多くの場合、『干祿字書』では俗字とされている文字で書かれているのは、下記の四十四種五十二字である（掲出字体はすべて正体字。カッコ内の最初のアラビア数字は、『李梗墓誌』の題を含めた全二十五行の行数、続く漢数字は五行各九字に分割して影印した『顏真卿書李梗墓誌』での図版の掲載頁、続くアラビア数字はそのページの行数である。あわせて参照した『王琳墓誌』『羅婉順墓誌』『郭虚己墓誌銘』は全体の中での行数のみをアラビア数字で示した）。

以下、顏真卿が用いている字体を「用例」、唐代またはそれ以前の時代の史料にある字体を「遺例」として、個別に検討する。遺例は、『書道大字典』⁴および『漢魏六朝隋唐五代字形表』⁵を参照した。

まず、以下の五字は、唐代の字体としても珍しい字体で、顏真卿のこれまでの用例とは全く合わない。

【惡】（14 十一 4）

『李梗墓誌』は上部の左を「𠂔」としているが、顏真卿が用いた用例はなく、近出の『羅婉順墓誌』（16）とも異なる。遺例も、上部を「卯」とする例はあるが、左が「𠂔」とする例は見当たらない、非常に珍しい字体である。

【學】（19 十四 4）

『李梗墓誌』は冠の中を「爻」とする。近出の『王琳墓

誌』『羅婉順墓誌』『郭虚己墓誌銘』には「學」字の用例はないが、その他のこれまでの顏真卿の用例は現行の旧字体と同じである。『李梗墓誌』の字体は、顏真卿の用例、遺例ともに無い。

【獄】（11 十一）

『李梗墓誌』は右の「犬」を「丈」とする。「丈」として右上の点の無い字体は、顏真卿の用例だけで無く、遺例にもほとんどない。

【垂】（16、十四 1）

『李梗墓誌』の二例中の一例は、中の「サ」の左を「丿」とし、下の「一」を「丨」とする。特に、この「丿」とする体は、顏真卿の用例はもとより、遺例にもない。残る一例（23 十五 3）は、中が「サ」下が「丨」で、こちらは『王琳墓誌』（26）をはじめ用例・遺例ともに存在する。ただ、同じ『李梗墓誌』の中で、用字に規則性がない点でも問題がある。

【逃】（21 十五 1）

『李梗墓誌』は旁を「𠂔」とする。「𠂔」を含めて、顏真卿の用例は現行体と同じ「𠂔」で、『李梗墓誌』の字体は遺例にも無い。

続く四十八字の多くは、『干祿字書』ではほとんどが俗字とされる字体で、顏真卿の用例になく、用字の規則性と合わない例である。

〔殷〕(23 十七3) 〔殿〕(2 四2) 〔毀〕(10 六5)
〔聲〕(25 十五5)

『李梗墓誌』は「爰」が、「殿」「毀」は「爻」、「毀」「聲」は「爻」となっている。顔真卿の用例は、「爰」がほとんどで、『王琳墓誌』の「聲」(8/24/25)と『郭虚己墓誌銘』の「役」(21)で「爻」とするが、『李梗墓誌』の「聲」は、顔真卿の字体ではない。『干祿字書』の「爰」は、「爰」が正字、「爻」は俗字とする。『李梗墓誌』は、「翳」(13 九3)は「爻」で顔真卿の字体だが、字体に規則性がないのも問題である。なお「殺」(13 九3)と「發」(24 十五4)は爻を「爰」とし、特に、殺は『干祿字書』は「爰」を正字とするが、用例を含めてすべて「爰」として、殺と發は規則性に合っている。また、「聲」の左上は、『李梗墓誌』は「尸」として点がないが、『王琳墓誌』(24/25)を含め、顔真卿の用例は中に点がある。

〔散〕(6 七1) 〔數〕(9 六4)

『李梗墓誌』では、「爰」が、「散」は「爻」、「數」は「爻」で、前の「爰」と混同されている。『干祿字書』がどちらも俗体は「爰」とし、遺例もあるので、「爰」と混同されていたのかもしれない。しかし、顔真卿の用例は、「散」は、『干祿字書』の正字、『羅婉順墓誌』(16)『郭虚己墓誌銘』(9/17)を含めた用例、いずれ

も現行と同じ字体、また「數」は、『郭虚己墓誌銘』(18/27)で「支」「爻」のずれがあるが、『干祿字書』の正字、他の用例、いずれも「支」で統一されている。
〔養〕(13 十一3)

『李梗墓誌』は右上の「爰」を「支」としているが、顔真卿の用例は「釐」で「爰」で、『干祿字書』も「爰」が正字である。遺例はあるが、顔真卿の規則性とは一致しない。『李梗墓誌』の「爰」を含む字は、このほかに、「變」(22 十七2)、「敬」(17 十二2/17 十二2)、「故」(1 三一/20 十二5/20 十三5)、「放」(21 十七1)、「務」(14 十四/23 十七3)があるが、これらは、いずれも用例と同じ「爰」で、顔真卿の用字の規則性との異同はない。

〔植〕(5 五5) 〔直〕(17 十二2)

『李梗墓誌』は、「直」の上を「亠」とするが、『干祿字書』が俗字とする字体である。遺例はあるが、用例および『干祿字書』の正字はいずれも「十」で、規則性に合わない。

〔於〕(15 九5/18 十二3/18 十四3)

『李梗墓誌』は「𠂔」とするが、『羅婉順墓誌』が「方」、『郭虚己墓誌銘』(11)が「𠂔」とするなど、用例は「方」「𠂔」である。「𠂔」とする遺例はあるが、規則性とは合わない上に、第18行(十四3)のように木扁の

行書のように書くことはさらにおかしい。

〔袖〕(12、十一2) 〔補〕(11、九1) 〔裕〕(23、十六3)

『李梗墓誌』は、「袖」「補」「裕」で衣扁を示扁にする遺例にはあるが、顔真卿は衣扁と示扁を混同したことはない。

〔哀〕(9、八4)

『李梗墓誌』は、「上」を「一」とする。遺例にはあるが、顔真卿の用例は、『王琳墓誌』(19/22/22/25)『羅婉順墓誌』(7/9/10/21/21)を含めて「上」で、「一」の形はない。

〔鬱〕(13、九3)

『李梗墓誌』は、ワ冠の上の中央が「夕」である。遺例は多いが、『干祿字書』は俗字とする。顔真卿の用例はいずれも「缶」で、規則性と合わない。

〔穎〕(7、八2)

『李梗墓誌』は左下を「示」にするが、遺例も少なく、顔真卿の用例は「禾」である。

〔焉〕(4、三4)

『李梗墓誌』は「焉」だが、遺例もわずかしかない。用例は、『王琳墓誌』(9)『羅婉順墓誌』(4/6)『郭虚己墓誌銘』(5/7/13)を含めて、いずれも「焉」である。

〔科〕(9、八4)

『李梗墓誌』は旁を「升」とする。遺例にはあるが、顔

真卿の用例にはない。

〔祇〕(15、十一5)

『李梗墓誌』は右上に点を加える。遺例にはあるが、顔真卿の用例、『干祿字書』ともに点はない。

〔朽〕(22、十六2)

『李梗墓誌』は旁を「亏」とする。『羅婉順墓誌』は現行の活字体と同じで、『李梗墓誌』の体は遺例もわずしかない。

〔舉〕(8、六3/14、九4)

『王琳墓誌』(25)『羅婉順墓誌』(8)『郭虚己墓誌銘』(27/33)はいずれも「舉」である。『李梗墓誌』は書写体で少し崩しているが字体が異なる。遺例はあるが、顔真卿の規則性とは合わない

〔御〕(2、四2)

『李梗墓誌』は「冫」とする。『郭虚己墓誌銘』(2/4/14/14/14/15/17/17/19)をはじめ、用例は「御」である。『李梗墓誌』の体は、遺例にはあるが、『干祿字書』は俗字とし、顔真卿の用例とも合わない。

〔經〕(9、八4)

『李梗墓誌』は旁を「丮」とする。『多宝塔碑』に「丮」とするものがある以外は、顔真卿の用例は、『王琳墓誌』(2)、『郭虚己墓誌銘』(12)を含めて、すべて「丮」である。『李梗墓誌』の字体はない。

〔牽〕(12 九2)

『李梗墓誌』は「牽」とする。顏真卿の用例は、『麻姑仙壇記』『顏氏家廟碑』の用例だが、現行と同じ字体と同じである。『李梗墓誌』の体は、遺例はあるが、『干祿字書』は俗字とする字体である。

〔原〕(18 十二3)

『李梗墓誌』の「日」の上に点の無い。『王琳墓誌』(1/4/24)、『郭虚己墓誌銘』(6/7/29)を含めて、顏真卿の用例は現行の字体と同じである。『李梗墓誌』の字体は、遺例はあるが、『干祿字書』は俗字とする。

〔厚〕(7 八2)

『李梗墓誌』は中の日を「日」とする。顏真卿の用例にはなく、遺例も少ない。

〔綱〕(4 四4)

『李梗墓誌』は旁の中を「𠂔」とする。遺例にはあるが、顏真卿の用例には、「岡」「剛」「崗」「鋼」を含めてもこの字体は無い。

〔參〕(4 五4/10 六5)

『李梗墓誌』は下を「小」とする。遺例にはあるが、『羅婉順墓誌』(16)、『郭虚己墓誌銘』(28/29)を含めて顏真卿の用例は、下は「小」である。

〔肅〕(8 七3)

『李梗墓誌』は下の「乚」の部分で「二」とする。遺例

にはあるが、肅を含めてみても、『王琳墓誌』(7/24/24)、『郭虚己墓誌銘』(35)を含めて、顏真卿の用例にはない。

〔將〕(3 四3)

『李梗墓誌』は「將」とする。旁の上を「夕」とする字体は、遺例にはあるが、『王琳墓誌』(5/6/18)、『羅婉順墓誌』(14)、『郭虚己墓誌銘』(8/11/15)を含めて、顏真卿の用例にはない。また扁を「𠂔」とする字体は、『郭氏家廟碑々陰』以外にはない。

〔齊〕(4 五4/12 九2)

『李梗墓誌』は「刀」を「尸」とする。遺例にはあるが、顏真卿の用例は、『王琳墓誌』(12)を含めて、「刀」である。

〔羨〕(12 十二2)

『李梗墓誌』は下を「𠂔」にする。遺例にあるが、顏真卿の用例は「𠂔」で、『干祿字書』も「𠂔」は俗字とする。

〔楚〕(12 九2)

『李梗墓誌』は「疋」の上の横画を「一」にする。顏真卿の用例はほとんどが「一」で、「二」にする字体は、『宋璟碑』の片方の例のみで、『干祿字書』も「二」は俗字とする。

〔倉〕(10 七5)

『李梗墓誌』は下を「君」にする。遺例にはあるが、顏

真卿の用例は、「創」「滄」「蒼」を含めてみても、『羅婉順墓誌』（16/17）を含めて、みな現行の字体と同じである。

【博】（7 八2/24 十五4）

『李梗墓誌』は左を「卜」にして右上の点はない。遺例にはあるが、『干禄字書』は俗字とする。顔真卿の用例は、現行の字体と同じで「十」に点がある。

【鞭】（14 十4）

『李梗墓誌』は、扁を「草」とする。遺例はあるが、『干禄字書』は革で「草」にする体は俗字とする。顔真卿の用例は、「羈」「霸」を含めて「草」にする字体は無い。

【隸】（20 十二5）

『李梗墓誌』は左を「夫」とする。遺例はあるが、『干禄字書』は俗字とする。顔真卿の用例は左が現行体と同じ「柔」で、右は「柔」である。『干禄字書』は現行体を正字とするが、序文は顔真卿の用例と同じ「柔」にする。

【齡】（16 十三1）

『李梗墓誌』は「𠂔」の中の「一」がない。この体は『干禄字書』は俗字とし、顔真卿の用例と『干禄字書』の正字は、いずれも「齒」で中の「一」がある。

【歷】（6 六1/10 七5/11 九1）

『李梗墓誌』は「厯」とする。『干禄字書』は俗字で、顔

真卿の用例は、『干禄字書』の正字と同じ、「歷」である。

第二節 顔真卿が書く可能性はあるが、これまでの用例とは異なる文字

以下の『李梗墓誌』の用例は、『干禄字書』では通字とされたり、顔真卿の用例にわずかにあるが、多くの用例に合わないなど、顔真卿が書く可能性が低い例である。

【繹】（20 十三5）

『李梗墓誌』は旁の下の横画が二本である。「擇」「澤」で、筆写体の多い『郭氏家廟碑々陰』のみに二本がある。

【畫】（18 十四3/20 十二5）

『李梗墓誌』は下を「囚」とする。顔真卿に用例はないが、『干禄字書』は通字である。

【海】（3 五3）【每】（14 九4）

『李梗墓誌』は母の中を「ノ」とするが、顔真卿の用例は二点と思われる。

【楷】（21 十七1）【極】（20 十三5）

『李梗墓誌』は、木扁を「𠂔」にする。遺例にはあり、『干禄字書』は別字として「𠂔」の字もとるが、他の顔真卿の用例は、極の『王琳墓誌』（23）『郭虚己墓誌銘』（11）を含めて、用例は木扁である。

【漢】（3 四3）【艱】（10 八5）【難】（15 十5）

『李梗墓誌』は、「莫」とし、上を四画の「𠂔」、下を「𠂔」とする。顔真卿の用例では、下を「𠂔」とするものが『多宝塔碑』にあるのみで、『王琳墓誌』の「𠂔」(17)「𠂔」(12)、『羅婉順墓誌』の「𠂔」(22)も含めて、いずれも「𠂔」であり、上も、『羅婉順墓誌』以外は三画の「𠂔」である。

【鑒】(8 八3)

『李梗墓誌』は右上を「𠂔」とする。『干祿字書』は通字とし、『郭虛己墓誌銘』(34)を含めて、顔真卿の他の用例と異なる。

【窺】(20 十四5)

『李梗墓誌』は、穴の下を「𠂔」とし、規の左を「𠂔」する。穴を「𠂔」にする用例は『多宝塔碑』のみで、そのほかは、『干祿字書』を含めて用例はない。また「規」の左を「𠂔」にするのは顔真卿に用例がなく、『干祿字書』は俗字とする。

【龜】(17 十四2)

『李梗墓誌』は「𠂔」の右に「𠂔」を書く。顔真卿の用例は数が少ないが、現在の旧漢字に近く縦棒が二本になっている。

【器】(24 十五4)

『李梗墓誌』は「𠂔」とする。『干祿字書』は通字とし、顔真卿の他の用例はいずれも「𠂔」である。

【傾】(24 十七4)

『李梗墓誌』は、「𠂔」を「𠂔」とする、顔真卿の用例は、印の左である。

【詣】(18 十四3)

『李梗墓誌』は右上の「𠂔」を「𠂔」とする。顔真卿の用例は、稽・指・旨を含めて「𠂔」であるが、『干祿字書』は「𠂔」も「𠂔」も通字とするが、用字の規則性とは合わない。

【藝】(8 六3/19 十三4)

『李梗墓誌』は「𠂔」とする。顔真卿の用例は、「𠂔」に「𠂔」が多く、「𠂔」は『八閩齋會報德記』のみである。遺例では両方ある。

【劇】(12 九2/23 十七3)

『李梗墓誌』は、旁を「𠂔」とする。顔真卿の用例は、據・璩・遽も含めてほとんど活字体である。遽で『干祿字書』は「𠂔」を通字とする。

【血】(10 八5)

『李梗墓誌』は状態が良くないが、上が「フ」なら、顔真卿の用例は無い。顔真卿の用例は、『王琳墓誌』(20)『羅婉順墓誌』(5)『郭虛己墓誌銘』(12)を含めて、いずれも上は「𠂔」である。

【戸】(11 十一1)

『李梗墓誌』は上が点になっているが、用例は『郭氏家

廟碑々陰」のみで、他は、『郭虚己墓誌銘』（18）を含めて「一」である。

〔廣〕（3 四3）

『李梗墓誌』は「廿」とする。顔真卿の用例は、『王琳墓誌』（4/15）『羅婉順墓誌』（7）を含めて「廿」である。

〔呉〕（12 九2）

『李梗墓誌』は下が「天」または「夫」の可能性がある。顔真卿の用例は、ほとんどが現行体で、『多宝塔碑』と『麻姑仙壇記小字本』に「天」があるのみにである。

〔侯〕（4 三4）

『李梗墓誌』は旁の下が「夫」とする。遺例はあるが、顔真卿の用例は、下が「矢」である。

〔叢〕（9 六4）

『李梗墓誌』は「叢」とし、积文は「叢」とする。顔真卿に用例が無く難しいが、遺例には「最」を含めて似た体はない。一方、「叢」の遺例に似た字体があるが、『干禄字書』は「叢」を正字とする。

〔作〕（11 十一）

『李梗墓誌』は旁を「作」にする。遺例にはあるが、顔真卿の用例は、「作」で縦が長い。

〔察〕（19 十四4）

『李梗墓誌』は、旁の冠が「𠂔」とする。顔真卿の用例

は、『郭虚己墓誌銘』（13/14/14）を含めて、いずれも左上が「𠂔」である。

〔四〕（17 十四2）

『李梗墓誌』の片方は口の中を「ソ」とする。遺例も少ない。もう一つの例（12 十二）は、『王琳墓誌』（12/26）『羅婉順墓誌』（20）『郭虚己墓誌銘』（17）を含めて、顔真卿の他の用例と同じように、「凡」となっている。

〔所〕（20 十三5/20 十四5）

『李梗墓誌』は「𠂔」とする。顔真卿の用例は「所」が多く、『羅婉順墓誌』『多宝塔碑』の一部にあるが、左は一点（𠂔）で形が違う。

〔秦〕（10 七5）

『李梗墓誌』は下を「示」にする。顔真卿の用例は「禾」で、『多宝塔碑』の臻に「示」があるのみである。

〔雖〕（15 九5）

『李梗墓誌』は左を「𠂔」として、左縦画が上の口まで通り、下の虫の点がない。遺例にはあるが、顔真卿の用例とは異なる。

〔喪〕（11 九1）

『李梗墓誌』は現行と同じ「喪」とする。『干禄字書』は通字とし、用例も『王琳墓誌』（17）のみ同じで、他の用例は「𠂔」である。

〔象〕(20 十二5)

『李梗墓誌』は、口の中の点がない。顔真卿の用例にこの字体は無いが、『干祿字書』は通字とする。

〔帶〕(14 十4)

『李梗墓誌』は「帶」とする。『干祿字書』は通字とする体で、「滯」を含めて、顔真卿の用例および『干祿字書』の正字はいずれも「帶」である。

〔誕〕(17 十二2)

『李梗墓誌』は旁を「返」とする。遺例もあり、「ㄣ」のこの体を『干祿字書』は通字とする。顔真卿の用例は、「延」「筵」も含めて「延」とし、『干祿字書』も「延」が正字である。

〔著〕(10 八5)

『李梗墓誌』は「著」とする。『郭氏家廟碑々陰』に同じ体があり、『干祿字書』も通字とする。『王琳墓誌』(3/9)を含めて顔真卿の用例は「著」である。

〔聽〕(20 十四5)

『李梗墓誌』は左下を「ㄣ」とする。顔真卿の用例はない。『王琳墓誌』(9)を含めて、用例および『干祿字書』の正字は左下は「王」である。なお『干祿字書』の通字は「聽」で、『李梗墓誌』とは異なる。

〔文〕(9 七4)

『李梗墓誌』の片方は「ㄣ」とする。遺例にはあるが、

『王琳墓誌』(7)『羅婉順墓誌』(3)『郭虚己墓誌銘』

(24)を含めて、顔真卿の用例にはない。

〔鳳〕(18 十二3)

『李梗墓誌』は「凡」の中の「一」が無い。遺例にはあるが、『王琳墓誌』(29)を含めて、顔真卿の用例はない。

おわりに

冒頭で指摘した、『李梗墓誌』と同年の『郭虚己墓誌銘』については、拙稿「顔真卿撰書『郭虚己墓誌銘』に用いられた字体について」⁶において、全一一三八字(五六九種)の字体を検討した。その結果、顔真卿の字体として問題がある文字は、顔真卿の用例が僅かで『干祿字書』の正字と異なる字体が二字、顔真卿の用例のない字体が十一字、遺例にも少ない(または全くない)字体が十字、の合計二十三字であった。『郭虚己墓誌銘』は全一一三八字のうちの約二・〇%に当たる。

これに対して、本稿で検討した『李梗墓誌』は、これまでの顔真卿の用例と比較して、第一節の全く異なる文字だけでも五十二字あり、これに、第二節の可能性はあるがこれまでの用例とは異なる四十一字を加えると九十三字に上る。『李梗墓誌』の文字数は、『郭虚己墓誌銘』の約半分の

六二二字であるから、問題のある文字は約十五・〇％となり、顔真卿の字体とその規則性に合わない字体が多い。

このほかにも、『李梗墓誌』がやや筆写体が用いられているという理由も関係しているかもしれないが、「日」(22十七2)が縦長である、「變」(22 十七2)の糸の下が二点になっている、「少」(5 五5/23 十五3)「妙」(7八2)の右の点がノの下にあるものがある、など顔真卿の字体とは異なるものが散見する。さらに、各文字が、上が大きく下が小さくなって重心が下がっていること(「鑒」8八3/「終」11 九1など)、右肩上がり引きずられて縦画まで左に傾く文字があること(「劇」12 九2/「何」22十七2など)、「月」「目」「貝」「頁」など口や口の中に横画を二本書く際には、特に上の横画を左の縦画から離して書く文字が多いこと(「寶」17 十三2/「眞」2 四2など)などのように、他の顔真卿の書には見られない書き方の癖がある。同年の『郭虚己墓誌銘』には、二年のちの『多宝塔碑』にも通じる確固とした構成力と力強さがあるが、『李梗墓誌』にはない。これらも合わせて考えれば、冒頭に「殿中侍御史顔真卿撰」とのみ書かれている通り、『李梗墓誌』の書者は、顔真卿ではないと考える。

注

(1) 李旭文・石胙梅編、河南美術出版社、二〇二四年五月

(陳振濂主編『新出隋唐墓誌精選』の二つ)。

(2) 飯島太千雄「試論―顔書の実像」(飯島太千雄編『顔真卿大字典』東京美術、一九八五年、一三〇―一四二三頁)。

これについては、拙稿「顔真卿の書の再検討―飯島太千雄氏の指摘を承けて―」(『中国―社会と文化』五、一九九〇年、二二六―二四五頁) 参照。

(3) 前掲注(2) 参照。

(4) 伏見冲敬編、上・下、角川書店、一九七四年。

(5) 郭瑞ほか編写、南方日報出版社、二〇一一年(臧克和主編『中国石刻叢書』の二つ)。

(6) 『書論』第三十四号、書論研究会、二〇〇五年、九十二―九十九頁。

(本学教授)